

---

## 目次



序章  
いのちを守りたい！

川村 千鶴子

1

第Ⅰ部  
越境のすすめ第1章  
グローバル市民として生きるチヨウ  
チヨウ  
ソー

14

はじめに

15

1 本屋さんが憩いの場

16

2 建築現場で働く

17

3 レストランの起業

19

4 ジャーナリストとして

20

5 教育に目を向ける

21

おわりに

23

第2章  
僕がパリの外国人だったところ増田  
隆一

24

はじめに——異国で暮らす

25

1 パリの日本人コミュニティ

27

## 2 フランスの公共サービス 31

おわりに 37

## 第3章

「多文化共創」は、辺境にこそあり！

下川進

39

——北の島サハリンで考えたこと

はじめに——辺境に行ってみよう！ 40

すぐそこにある不思議の島、サハリン 41

注目！ コリア系サハリン人 43

領土問題の最前線ではあるけれど…… 47

## 4 ここはかつて戦場だった 48

おわりに——厳しい現実を超えて 50

## 第4章

映画から学ぶ移民とダイバーシティ

ダニエーレ・レスタ

52

——映像メディアのパワーと役割 53

はじめに——映画はなぜパワフルなのか 54

## 1 映像メディアの社会的役割 56

映画に見る移民とダイバーシティ 58

移民映画で地域交流!? 61

おわりに 61

## 第Ⅱ部

## 主体性と多様性の学びが未来を拓く

## 第5章

## 外国にルーツをもつ子どもたちへの日本語教育

—— JSL教師の育成と支援を！

関口 明子

64

はじめに 65

1 日本の難民受け入れ 66

2 難民への日本語教育 68

3 外国にルーツをもつ子どもたちへの日本語支援 71

4 JSL教師の育成と支援を！ 74

おわりに 78

## 第6章

## 夜間中学でいつでも誰でも基礎教育を！

—— 義務教育機会確保法成立までの道程

関本 保孝

79

はじめに 80

1 学習権が基本的人権を守る 81

2 多様化する夜間中学生 83

3 夜間中学での取り組み 84

|  |            |                          |     |              |
|--|------------|--------------------------|-----|--------------|
|  | 4          | すべての人に義務教育を！             | 86  |              |
|  | 5          | 政府が動き始めた                 | 88  |              |
|  | 6          | 基礎教育保障学会の設立              | 89  |              |
|  |            | おわりに——義務教育機会確保法が成立       | 90  |              |
|  | <b>第7章</b> |                          |     |              |
|  |            | <b>地域に根ざした大学のグローバル教育</b> |     |              |
|  |            | ——秋田からの挑戦                |     |              |
|  | 1          | はじめに——農山村の多文化空間          | 93  | <b>梶本 歩美</b> |
|  |            | 国際教養大学の多文化共生キャンパスライフ     | 95  |              |
|  | 2          | 地域に根ざしたグローバル教育を創る        | 98  |              |
|  |            | おわりに——秋田が世界とつながるとき       | 105 |              |
|  | <b>第8章</b> |                          |     |              |
|  |            | <b>庇護申請中の子どもたちと学び合う</b>  |     |              |
|  |            | ——多様性を認め合う学校             |     | <b>土田 千愛</b> |
|  |            | はじめに                     | 107 | 106          |
|  | 1          | 庇護申請者とは                  | 108 |              |
|  | 2          | 庇護申請中の子どもたちの生活実態         | 108 |              |
|  | 3          | 多様性を尊重する企画づくり            | 113 |              |
|  |            | おわりに                     | 118 |              |

## 第Ⅲ部

## まちも会社も活性化する「多文化共創」思考

## 第9章

多文化対応で住まい探しのお手伝い

——不動産屋が担う、まちのグローバル化

はじめに

121

海外渡航が仕事のきっかけに

121

住まいの情報を集めて回る

125

外国人向け賃貸事業を始める

126

グローバル化は不動産会社から

128

多文化スタッフによる「外国人サポートセンター」

131

おわりに

132

荻野 政男

120

## 第10章

多様性を生かせば経営が変わる

——多文化共創という理念と実際

はじめに

134

多文化共創にマーケティングが役立つ

134

マーケティングの原点は相手の心を理解して好きになってもらうこと

135

市橋 和彦

133



## 第Ⅳ部

## いのちに国境はない

## 第12章

多文化スタッフが担うチーム医療

富田 茂

164

—— まちの多文化クリニックの試み

はじめに——クリニックの成り立ち 165

言葉の問題 166

1 医療費と制度——外国人は医療費の支払いが困難なのか？ 169

2 生活の変化と医療 171

3 病気の予防について——健康診断 173

4 障害の予防について——リハビリテーション 175

5 おわりに 176

## 第13章

医療現場の多言語化を担う

マ  
テ  
ン  
テ  
ン  
ウ

177

—— 医療通訳という仕事

はじめに 178

1 日本へ 179

2 医療通訳者になる 180







## 終章

|   |                             |     |
|---|-----------------------------|-----|
| 5 | 外国人患者が増えると未収金が増えるという誤解      | 205 |
| 6 | 多様な文化についての学びと実践             | 207 |
| 7 | 地域に伝えていくこと                  | 209 |
| 8 | 1点20円の重み                    | 210 |
|   | おわりに                        | 212 |
|   | <b>世界の混迷と危機を多文化共創のチャンスへ</b> |     |
| 1 | はじめに                        | 214 |
|   | 路地裏は多文化の宝庫                  | 214 |
| 2 | 10代のみなさんへ                   | 215 |
| 3 | いのちの大切さを教えてくれた、あらゆる民族の助産訓練  | 218 |
| 4 | 強制移動と平和のためのミュージアム           | 218 |
| 5 | 老年期を迎えるとき                   | 222 |
|   | おわりに——多文化共創博物館              | 223 |

多文化共創の実践者から政府・自治体への7つの提言

225

川村 千鶴子

213



写真：24週目を迎えた胎児のエコー写真。母親と胎児のいのちを守るための記録である。

## 序章

# いのちを守りたい！

川村 千鶴子

心臓の鼓動が聞こえますか。胎動を感じますか。

人はいつ、誰から、どこで生まれてくるのか、自分で選択することはできません。1年間に毎年1億人以上の赤ちゃんがこの地球のどこかで生まれています。

出産がどんなにいのちがけであっても産声は悦びに包まれ、生きる希望を与えてくれます。紛争や戦火のなかや難民キャンプのなか、迫害を逃れて密航船や逃亡の機内、避難所やテントのなかであっても、あらゆる子どもは、妊娠・出産のプロセスから誕生します。人間の誕生は本当に神秘的です。

「わたしは、いつ、どこで、誰から生まれたのかわからない。」  
これまでに「誕生日を自分で決めた」という話を聞いたことが

何度もあります。また、「母国では、自分の死亡届を出してある」と話した人もいました。それぞれの人生を勇敢に逞しく生きていると感じました。人はどのようにして精神的な苦悩を克服し、人格的な成長を遂げるのでしょうか。

### いのちのパスポート

多様性を受け入れるということ、それは、出自 (descent) の多様性を寛容に受け入れることでもあります。出自 (descent) とは、親子関係の連鎖によって子孫をある特定祖先に結びつける系譜的結合を指しています。あらゆる人のいのちに向き合うことは、出自にかかわらず、多様性に向き合う旅の始まりではないかと思うようになりました。パスポートは、人間個人にとって、司法的同一性を担保するものです。パスポートの有無や、国籍の有無が、人生と日常生活のさまざまな場面で人々を翻弄することになることを、私は地域の移住者、そして難民の方がたから学びました。

ところで、日本は母子健康手帳の発祥地です。今30カ国を超えて世界に広まりつつある母子健康手帳は、胎児の成長を記録した身分証明ではないだろうかと思うこともあります。「親子健康手帳」「父子健康手帳」と名称を変え、25歳までの記録を記入できるライフサイクル手帳に変わっています。「父子手帳」は、父親も子育ての知識や母体の変化、子どもの成長を記録して幅広い情報が掲載できます。

2016年11月「第10回母子手帳国際会議」が東京・国連大学で開催されました。ケアの継続と実践は、乳児死亡率と妊産婦死亡率を下げ、日本を世界一の長寿国、健康寿命の高い国にしました。いのちを大切にすることは地球を守ることであり、世界の人々と信頼の輪を広げながら、幸福度の高い

社会を築いていくことの土台となっています。

目の前にいる「いのち」を守るのが医療に携わる人々の使命であり社会の責任です。

目の前にいる子どもの「基礎教育」を保障するのが、教育者や国、保護者の責務でもあります。基礎教育は、読み書きの力であり、想像力と創造性を生み出します。まさに学習権は、あらゆる人の生きるための生存権でもあります。日本語教育も母語教育も同様に重要であることが広く認識されるようになりました。企業の経営理念には、多様性に価値を見出すマネジメントが重視されています。自治体の基本理念も地域住民の多様性をプラスに捉えて「多文化共創」への決意が包摂されるようになりました。こうした実践が、多文化化のリスクを熟知し、社会的リスクを回避するカギを握っているからです。

国は、地域の多様な人々の実践とそこに萌芽するいのちの重みを「共創価値」と受けとめる時代を迎えています。

**本書は、不確実な時代を主体的に生きるあなたに贈る本です**

国境を越えて移動する人の数は、この地球上の10億人に達しています（国際移住機関…IOM）。

内戦が続くシリアやアフリカの紛争などにより家を追われた人々の数は、世界で6500万人を超え、そのうち18歳以下の子どもの数は半数以上です（国連）。シリアから国外に避難する難民の数が約500万人となり、国内で家を追われ避難している人が650万人（UNHCR）にのぼると言われています。

私は2016年夏にミャンマーを視察し、総選挙後、民主化が進んでいると思われるミャンマーで

も少数民族の紛争からたくさん国内避難民が生まれていること知り衝撃を受けました。国内避難民 (Internally Displaced Persons: IDP) には明確な法的定義が存在しませんが、紛争や政治的な迫害、そして災害等により、非自発的な移動を強いられて自国のなかにいる人々が国内避難民と呼ばれます。国内避難民は、脆弱な国家から守られることなく飢餓の様子が伝わってきます。

また無国籍者として生きる人々が、世界に約1200万人とも言われています。2015年から、ネパール・イタリア・ミャンマーでの大地震といった災害、フランス・ベルギー・バングラデシュ・ドイツなどでの同時多発テロ、中東複合危機と難民の急増、イギリスのEU離脱、北朝鮮の核実験、アメリカの新しい大統領の就任の衝撃など、世界はまさに厳しい激動の時代です。

そうした不確実な時代に、一番大切なものは、危機をチャンスに変える「主体性」をもって日々を着実に過ごすことではないでしょうか。

### 本書の執筆陣は、全員が主体的実践者です

本書は、多元価値社会に第一線で活躍するジャーナリスト、外国にルーツをもつ人々、難民、先駆的経営者・教師・医師・医療関係者によって書かれました。それぞれのライフストーリーには、多様な人々の橋渡しを担ってきた蓄積と勇気が溢れています。

この不確実な時代を、着実に主体的に生きるための悲喜こもごものライフストーリーや苦労話と提言も書いてくださいました。多様なルーツをもつ人々が共に安心して暮らせるまちづくりとは、外国人を単なる「労働力」とみなすのではなく、「同じ人間として」「いのち」の大切さを共感し、ともにまちを創ろうとするエネルギーが土台にあります。

本書では、ビルマ難民のリーダーとなって活躍するジャーナリスト、イタリア出身で情報基礎とメディア論を指導する大学教員、ビルマ出身の医療通訳者、ネパール出身の作業療法士が、地域の多文化意識を高めている実践の相乗作用を彼ら自身の日本語で伝えてくれます。そして、子どもたちの基礎教育、日本語教育と「医・職・住」を支えてきた先駆的実践者が、それぞれの経験から生み出された共創価値とは何かをお伝えします。

明るい幸福な未来を目指して胎動を聴きながら、いのちの旅を始めませんか。

### あなたにとってトランスナショナリズムとは何ですか？

トランス (transce) とは、敷居や境界を越えることです。さまざまな壁を乗り越えてきました。乗り越えたのではなく、すり抜けたのかもしれませんが。政治的な問題や法律の矛盾や、体力の衰えなど人生の悲哀にぶつかることもあります。異文化間移動によって、人は、アイデンティティの揺らぎに敏感になります。人と人との橋渡しができる力、誤解や軋轢が生じてもそれを乗り越える気概はどこから生まれてきたのでしょうか。

何が持続可能な活力の潤滑油になるのでしょうか。

アイデンティティを概念化した E・H・エリクソンは、「ケアの蓄積こそが、叡智 (wisdom) を生み出す」と結んでいます。ケアとは、気遣い、思いやり、手助け、いつくしみなどを意味しますね。相互ケアの経験が、どのように信頼を生み出し、多様性を肯定的に受容する「叡智」となるのかを本書から読み取っていただけると幸いです。

トランスナショナリズム (transnationalism) とは、国家の枠組みはあっても、一人ひとりの生活意

識のなかに多文化意識が芽生えている社会空間です。いのちと向き合っている人々は、日常生活のなかでは国境や国籍の意識が消失するような感覚をもっています。出身国との間を頻繁に往復する人々は、双方の国に対して帰属意識をもち、インターラクティブな社会的ネットワークが創られていることも感じられるでしょう。

### 多文化共創まちづくり、一緒にやってみませんか

私たちは多元価値社会を生きています。多文化共創 (Multicultural Synergy) とは、単に文化的多様性を尊重するだけではなく、障がい者、一人親家庭、移民、難民、無国籍者、無戸籍者、性的マイノリティ…LGBTQ I (レスビアン、ゲイ、バイセクシャル、トランス・ジェンダー、クィア、クエスチヨニング、インターセックス) など多様な年齢の生活者との相互ケアの実践を通して生まれます。安心の居場所にアクセスしにくい庇護申請者の子どもたちにも光を当てています。多文化共創まちづくりとは、あらゆる人の安心の居場所の創造です。

安心の居場所づくりは、インターカルチュラル・プレイスメイキング (Intercultural Place-making) と呼ばれ、自治体や企業、大学、高校、医療施設、市民団体も連携しています。年齢や文化的背景、異なる出自の人々が安心して交流できる公共的な空間とともに創っていくことです。博物館、図書館、公民館、夜間中学・自主学級やクリニック・病院、大学・高校などが地域を支えています。そういった空間では国籍ではなく、グローバル市民が中心的役割を担っている活躍していることがわかります。「いのち」に向き合う実践者は、ケアの実践からコミュニケーション能力を磨き、未来のために何をなすべきかの叡智 (wisdom) を獲得しました。グローバル市民による「安心の居場所」の創造は、相



乗作用を生み出し、心豊かな幸福度の高い社会の創造につながり、世界中に連鎖していくからです。日本には約230万人の外国籍住民がともに暮らしています。二世・三世・四世を迎えている人々も海外にルーツをもつ日本国籍をもっている人々も大勢います。異文化をもつ来訪者、移民や難民の方々と外国人住民の発想や実践によってクリエイティブな街が形成されています。

### 本書は、どこから読み始めても面白いです

第I部は、情報の共有とメディア・リテラシーの大切さをお伝えします。国民のコンセンサスは、情報メディアに大きく影響を受けます。世界を駆け回ったジャーナリスト、映像メディアを通して地域連携事業を実践する大学教員が情報メディアの大切さを伝えます。

来日26年のビルマのジャーナリストは、「難民」としてではなく「グローバル市民」として活躍しています。

パリの特派員は、フランス語会話の夜間学校に通ってフランス語をマスターした楽しい体験談を語ります。サハリンなど辺境に暮らしたジャーナリストはナショナル・アイデンティティとカルチュラル・アイデンティティを発見しました。歴史から未来につながる多文化共創の可能性と実践を「いのち」に光を当てて紹介しています。

高島平団地には、800人を超える外国籍住民がともに暮らしています。社会人を対象に多文化共創アクティブ・ラーニングを展開するイタリア人教師の実践も読んでください。

第II部は、日本語教育、日本語教師の資格、基礎教育の保障、中学・高校・大学の主体性の教育が

テーマとなっております。教育の現場は、グローバル社会の鏡です。日本が向かうべき進路を示唆してくれます。国際教養大学では、多文化共創アクティブ・ラーニングの実践によって、地方創生の道を拓いています。農業に外国人労働者を受け入れたいという日本政府は、一人ひとりが適応能力を高めコミュニティの構成員となって活躍していく方法も検討する必要があります。大学の取り組みは大変参考になると思います。また庇護申請中の子どもたちの生活実態と中等教育における多様性を尊重する取り組みは、日本が移民や難民をどのように受け入れていったらよいかを示唆してくれます。「差異」を認め合う学校教育がいかに大事であるかを考えるうえで多くの発見があると思います。

第三部は、グローバル化、経済社会のボーダレス時代の企業のあり方を考えます。

グローバル時代のエクセレント・カンパニーとは何でしょうか。地域のグローバル化は、不動産屋さんから始まります。世界企業、不動産会社経営者、企業のCSR、エスニックビジネスの起業・雇用・経営から、さまざまな可能性が浮かび上がってきます。「多文化共創マーケティング」を実践したパイオニアの経験と提言が編み込まれています。

第四部は、いのちと向き合う医師、作業療法士、医療通訳、医療コーディネーターが、医療の国際化の現実を細やかに披露し、示唆的なメッセージを読者に投げかけています。医療通訳は法廷通訳同様、技術的に高度な翻訳力が要求される仕事であり、国際医療の要です。クリニクでは、ビルマ人に注射をするとき、「チクツとしますよ」は「アリさんが咬みますよ」と通訳されます。このように多言語対応とトランスカルチュラル・ナーシングは、国際医療と地域のグローバル化に不可欠です。

異文化や宗教上の配慮や医療通訳がある医療機関の実践はすでに始まっています。ネパール出身のドルジ（渡留待）さんは、どんな辛いことがあっても諦めてはいけないことを強調しています。

### グローバル市民の誕生がテロや犯罪を防ぐ

当然のことながら外国籍住民も所得税・住民税を納税している日本のタックス・ペイヤーです。納税者としての社会貢献だけでなく、地域のまちづくりへの貢献も大きく、自治体は外国人代表者会議を継続し、自治体行政に反映しています。「医・職・住」は、移住者にとつての生活のベースです。グローバルな人の移動の連結点となる都市インナーエリアでは、1980年代後半から外国人の増加と年間外国人の4割が転入・転出するという高流動性を受け止めてきました。新しい出会いが主体的まちづくりを加速します。実践に培われた信頼は、共に創る仲間としての相互に市民意識が生まれていることを読み取っていただけだと幸いです。相互に支え合う「まちづくり」は、相互にコミュニケーション能力を伸ばす相乗作用があります。地域が人を育てているのです。

自治体は、外国人住民と代表者会議を開き、教育機関、医療機関、大小さまざまな企業や商店街、NPO／NGOと連携してまちづくりを推進してきました。

### 日本政府への提言——2017年社会統合政策への旅立ち

人口減少社会のなか、日本は今、新しい年を迎えました。国は、外交的に資金援助だけで国際貢献を果たすのではなく、多文化社会の内面を支えてきた市民団体・外国籍住民・自治体の叡智を積極的に吸い上げて「多様性の国・日本」の社会統合政策（Integration Policy）を踏み出そうとしています。

国際法と国内法の矛盾を解消すべくさまざまな法整備をすることは、国家としての責務です。無国籍状況に置かれた人々への対応、庇護申請者へのきめ細やかな対応、国際医療の充実など本書の実践者からの提言に耳を傾けていただけると幸いです。

日本政府は、元不登校・ひきこもりの若者を含めた広範な義務教育未修了者への学習権保障の必要性を打ち出し、2015年「形式卒業者」の夜間中学受け入れを認める通知を出し、2016年から外国にルーツをもつ生徒が多い夜間中学の拡充と新設にも力を入れています。「義務教育の段階における普通教育に相当する教育の確保等に関する法律」（義務教育機会確保法）が2016年12月7日、国会で成立しました。夜間中学の関本先生（第6章）ら、全国夜間中学校関係者が半世紀以上かけて取り組んだ結果です。学習権は生存権であり、本書の祈りが通じたような嬉しい気持ちです。日本語教育は、最もやりがいのある仕事として認識される転換期にあり、日本語教師や日本語学校の位置づけも重要課題となっています。

出入国管理及び難民認定法も改正され、在留資格に「介護」が追加されました。さらに、2017年、日本はシリアから5年間で150名の難民を留学生として受け入れます。シリアの留学生が、将来、世界の架け橋として活躍することができるように、安心して学ぶ環境を整えることが先決です。多文化共創アクティブ・ラーニングに主眼が置かれる理由は、人権教育や多文化教育に資するだけでなく、社会人になったときに、主体性とコミュニケーション能力が大いに発揮されるからです。紛争や差別の原因ともなる搾取や格差社会を是正し、社会の分断を防ぐうえでも有効です。